HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ピアジェと現象学 ： メルロ＝ポンティとの論争をめぐって
著者	小島，康次; KOJIMA, Yasuji
引用	開発論集(107): 53-74
発行日	2021-03-17

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第107号　53-74（2021年３月）

ピアジェと現象学

―― メルロ＝ポンティとの論争をめぐって ――

小　島　康　次*

序　　論

本論は，20世紀の発達心理学に多大な影響を与えた大理論家，ジャン・ピアジェを中心に，今後の発達心理学理論の行方について論じることを目的とした論考である。ピアジェ理論は，既に第一線の理論としての価値を失ったという評価が定着して久しい。それは，1980年にピアジェが没した後，津波のように心理学界，とくに発達心理学界を襲った巨大な波だったと言えよう。1970年代までのアメリカ心理学界におけるピアジェブームに対する反動だったかもしれない。

アメリカにおける心理学理論の大転換は20世紀初頭の行動主義を嚆矢とすると考えられる。世界初の実験心理学教室がヴントにより，ドイツのライプツィヒ大学に開設されたのは19世紀後半，1879年のことだった。アメリカからの留学生が多数訪れ，学位を取得して帰国，アメリカの心理学界の濫觴となったことはよく知られている。その後，1912年にアメリカとドイツで，全く異なる大きな理論的転換が起こった。ドイツでは，実験心理学の元となった17世紀以来のニュートンモデル（要素還元主義）が場の理論にとって代わられ，ゲシュタルト学派が起こった。それに対して，アメリカでは，ヴントの実験法である内観法の客観性に対する批判から，ジョン・B・ワトソンによって行動主義の心理学が旗揚げされた。

ゲシュタルト学派と行動主義の始まりがともに1912年であったことは全くの偶然であり両者の間に因果関係はなかった。しかし，両者に対するヴントの態度は全く異なるものだった。お膝元で起こったゲシュタルト学派に対するヴント自身，また，ヴント一派の批判は激烈なものだった。ゲシュタルト学派とヴント一派との論争は実験的にも理論的にもさまざまなレベルで行われたことが記録に残っている。ゲシュタルト学派が，当初，ミューラー＝リヤーの錯視に代表されるような知覚に関するデモンストレーションの実験を多数考案したのは，ヴントの実験心理学が主として感覚・知覚にまつわる実験を行っていたことによると考えられる。しかし，さしものヴント学派もヴントが1920年に没したのを境に急速に勢いを失うことになった。

それに対して，同じ1912年にヴントの実験法である内観法を批判して立ち上げられた行動主義について，ヴントはほとんど反論らしきことを行っていない。と言うより，反論する価値

*（こじま　やすじ）北海学園大学開発研究所特別研究員

を認めていなかったのではないかと思われる。ともにヴント心理学の批判を契機として始まった2つの心理学説の違いは奈辺にあったのか。ゲシュタルト学派の背景には，ヴント心理学がモデルとした物理学のニュートン主義における理論的変化があった。17世紀から約200年にわたって科学の基本概念として信奉された「実験観察法」と「要素還元論」という理論的前提を根本から覆したのが，ファラデーとマクスウェルによって定式化された場の理論だった。とくに要素還元論については，ニュートンとデカルトの論争があったように，当初からその問題点が指摘されていた曰く付きの仮説だった。このように，ゲシュタルト学派は，決して単なる思い付きで始まった学説ではなく，理論的な必然性があり，大文字の科学方法論の裏打ちがあったのである。行動主義が背景となる理論を欠いていたというのでは決してない。イワン・P・パヴロフの研究室で学んで帰ってきたワトソンの弟子ラシュレーによってもたらされた条件反射学説が行動主義の背景としての役割を果たしたことは間違いないであろう。しかし，ゲシュタルト学派と行動主義を比較した場合，どうしても背景理論としてのレベルの違いに目がいく。片やニュートンモデルと言う，科学革命と呼ばれた理論における大転換で，第二の科学革命とでも呼ぶべき変化であるのに対して，条件反射学は生理学の分野におけるローカルな発見に過ぎない。しかも，その参照の仕方は必ずしも正しくなかった。パヴロフは，反射とは別に，第二信号系という高次精神過程を認めていたのに対し，ワトソンは，あらゆるレベルの行為を条件反射に還元しようとしたのである。

ここで，20世紀初頭に起きた心理学界における大きな変化を論じるのは，それらの詳細について紹介することが目的であるよりは，アメリカとヨーロッパの理論に対するスタンスに違いがあるということを指摘したかったためである。特にアメリカにおける学説の変化が往々にして深く理論的考察を行った結果ではなく，思い付き的なものであることが頻繁にみられる点を指摘したかった。それは，取りも直さずピアジェ理論に対する批判的言説に如実に反映されていることだと思われるからである。

ピアジェ理論がアメリカに導入された理由の恐らくもっとも大きなものは，ジェローム・S・ブルーナーによる教育改革を支える理論的背景の必要性だったのではないだろうか。第二次世界大戦後，アメリカとソヴィエト連邦の間で起こった冷戦のさ中，「スプートニク・ショック」をきっかけに教育改革の必要性から，高度な教育内容を実施するために，カリキュラム改革と幼児教育の重要性が提言された。折しも1950年代から60年代にかけて，アメリカにおいても行動主義（スキナー派）から認知心理学の時代へと転換するタイミングで，ピアジェの認知発達理論が導入されたのである。それから，アメリカにおいては，チョムスキー派による生得主義との論争，ヴィゴツキー派による歴史・文化主義との論争等々，ピアジェ理論は幾多の理論的洗礼を受けてきた。そして，それは5～10年遅れで我が国の心理学界にも波及したことは特筆に値する。

20世紀を代表する発達心理学における大理論家ピアジェにまつわる論争を紐解くことによって，これまでの発達理論を脱構築すると同時に，今後の発達心理学のあり方を模索する手

掛りを得られるのではないか，というのが本論をその一部とする「ピアジェの影を追う」という構想の骨子である。チョムスキー派との論争も，ヴィゴツキー派との論争も，アメリカにおいては，やや浅薄な感を免れないけれども，あえてその背景にまで遡って理論的考察を加えることで，本来のピアジェ理論のエッセンスを深く掘り下げて議論できるのではないかと考えられる。

本論は，とくにフランス語圏における議論，就中，メルロ＝ポンティに代表される現象学的心理学と科学的心理学との論争について紹介し，発達理論をめぐる科学論的発想と哲学的発想に関する問題点を明確化しようとする試みである。この論争は，現在も未だ完全に決着がついているわけではない。したがってこの論争の最終的な解決については今後の課題とさせていただきたい。

1．科学的心理学が成立した背景

1-1　自然科学としての心理学

19 世紀，ウィルヘルム・ヴントによって始められた科学的心理学は科学の実践と目的を踏襲することで発展してきた。その時モデルとした科学はもっぱら物理学あるいは自然科学（物理学，化学，生物学，生理学，等々）であった。そこで，まず，提起すべき問題は，心理学は自然科学諸科学の実践と目的を模倣すべきだったのか，ということである。心理学は無批判に自然科学の目的を受け入れるべきだろうか。あるいは，それ自身の目的を明確にすべきだろうか。要するに，心理学の主題は自然科学のそれと一致するのだろうか，似ているだけなのだろうか，あるいは根本的に異なっているのだろうか。最初の二つの選択肢のうちのどちらかが答えならば，心理学が自然科学の線に沿って進むのは基本的に正しい。しかし，後者の選択肢が正しいとすれば，心理学は自然科学が概念化し，実践してきた方法とは異なる方法で，自らを概念化し，実践すべきではないだろうか。個人としての人間の経験と行動の全領域について科学的に綿密な調査をすれば，科学的心理学について，現在とは異なった概念化が必要になるかもしれない。

たしかに，自然科学的心理学は，人間の諸側面についての正当なデータを生み出しているものの，自然学的概念に従う諸局面が人間の人間らしさを明らかにするのに適当であるかどうかについては，深刻な疑問がある。心理学にもう一つ別の概念を求めるとすれば，生活世界における日常生活の経験というデータがあり得るからである。それは個人としての人間の現象ならびに科学の実践の両者に正しい評価を与えるような心理学の概念になるはずである。

19 世紀，実験心理学が始まった時には，こうした選択肢はなかった。科学とはすなわち自然科学のことであり，議論の余地はなかったからである。しかし，今日，自然科学的心理学の 150 年にわたる経験の後では，心理学の既成の概念の方向で，これまで通りの努力を払うべきか，あるいは，科学についてのより広い概念を包含するような新しい心理学概念が必要である

のか，という問題を提起することが可能である。こうした問題提起は，決してこれまでの心理学に関する自然科学的概念を完全に否定することではない。ただ，これまでの心理学が本来の目的を自分自身の用語で明確に定義してこなかった可能性はないのかという疑問である。

心理学を自然科学の中に入れるべきではない，という立場が存在する。しかし，だからと言って，心理学は自然科学から除外されることが即，科学の領域を去らなければならないわけではない。もう一つの可能性は，心理学が対象としてきた現象を「人間科学」として維持することが可能ではないかという議論である。しかし，「人間」と「科学」という語の結合がそれほど簡単ではないことも事実であろう。まず，科学としての心理学の歴史の理論的な流れを辿り，その後人間科学としての心理学の可能性についての議論を参照してみよう。

1-2　実験心理学と科学的心理学

心理学は科学としての位置づけを常に問題にされてきた歴史的経緯がある。まず，この点について問題提起してみよう。これは心理学が科学の歴史（17 世紀科学革命からすると 19 世紀後半という最後尾に位置する）上，比較的若い学問だからなのだろうか。もともと心に関する学問は，アリストテレスの『デ・アニマ（霊魂論）』以来，哲学のテーマだった。そこから分化して独立科学となった経緯とその際に心理学が独自の課題をどのように設定したのかを探ってみる。

先に述べたように，心理学が独立の科学としての宣言は，1879 年，W. ヴントによってライプツィヒ大学における実験心理学教室の開設に端を発することは周知の事実である。しかし，この一事をもって，心理学がそれまでの哲学としての歴史を脱して，一気に自然科学の一員に成った（ほとんどの教科書，入門書にはそのように書かれている）というのは少々不自然ではないだろうか。

ヴントが心理学の創設について演じた役割を体系的に論じた書物はエドウィン・G・ボーリングの『実験心理学史』（1929，改訂版 1950）がもっとも詳しく，正確なものとされている。それによると，ヴントは医学と生理学を学んだ後，心理学へと進んだのだという。1860 年代，ヴントはハイデルベルグで医療物理学と実験心理学の講義を行っていた。当時，まだ生理学が物理科学として認められていなかったために，それを医療物理学と主張する必要を感じていたのではないか，というのがボーリングの推論である。したがって心理学もその延長上に生理学的心理学（後にヴントの主著の書名となる）として，一つの科学と主張されたと考えられる。その時の科学とは，言うまでもなく「物理科学」の意味であった。

ボーリングは，1862 年から 1866 年まで，ヴントが「自然科学の立場からみた心理学」という一連の講義を行っていたこと，1867 年からは同じ講義のタイトルが「生理学的心理学」に変わったことを指摘している。しかし，それまでもフェヒナーの『精神物理学提要』（1860）のように，実質的な実験心理学に相当する研究はあったのである。フェヒナーは精神過程を測定し，それを量的に示すことができたことで，厳密な数量化，実験的手法に成功した最初の学

者と言える。同様に，ヘルムホルツも視覚および聴覚の過程を自然科学の方法によって研究する可能性を示した。また，エビングハウスは高等な精神過程（記憶）について自然科学的方法に合致したやり方で実験を可能にしたことで名声を得られた。

1900 年以前のアメリカにおいてもっとも著名な心理学者といえばウイリアム・ジェームズであろう。彼は，心理学を精神生活の現象および条件についての科学であると定義した。ジェームズの言う科学が自然科学のことであったことは間違いない。そのことを著書『原理』（1890）において述べたのは，哲学的問いに答えなくても，心理学は具体的作業に取り掛かることができるということを保証するためだったとされる。序論で述べたように，アメリカにおける学説の転換が深い理論的考察なしに，比較的簡単に行われるメタ理論的発想がここに見られる。敢えて言えば，プラグマティズム哲学の創始者の一人でもあるジェームズの哲学的言説が背景としてあったのかもしれない。

1910 年代から 1930 年代までにもっとも注目すべきは心理学の支配的モデルを目指すライバル，ゲシュタルト心理学と行動主義の到来であろう。この二つの学派の基本的考え方の内容が全く対立的なものだったことから，互いの長所をめぐる議論が激しく展開された。この時期の行動主義の急進性そのものが議論を活発にさせ，次第に行動主義的アプローチが承認され始めた。なぜなら，行動主義者はその時代の期待に応じた実践を行うことができたからである。動物を使った研究や，人間への「客観的」手続きを使用して，学習や動機づけに関するデータを集積し，さらに数量的表現を与えることができた。行動主義者は，大部分の心理学者が科学的だと考える方法で心理学という科学を展開できる手段をもっていた。ワトソンは，「心理学は人々の行動を主題とする自然科学の一分野である」とし，さらに「科学のデータは共通の財産であり，科学の方法は，その形式が違っていようとも，基本的には同一である」とした。

他方，ゲシュタルト学派は「心理物理並行説」を取ることで，心理学が科学であることの理論的承認を可能にした。また，ゲシュタルト学派は，ヴントが自然科学の範としたニュートンモデルに対して，19 世紀にパラダイム転換が起こった物理学における場の理論をモデルとすることで，新たな自然科学主義の装いを纏うこととなった。1960 年代以降，アメリカに導入された際には，内観法的な方法論の不備をコンピューター・シミュレーションによって克服することで，認知心理学となって現在に至ることは周知の通りである。

2．人間科学としての心理学小史

心理学の中には，心理学を人格としての人間を研究対象として定義する伝統がある。今日，このような考え方は，以前よりも強くなっていると考えられるけれども，その影響は自然科学としての心理学ほど大きなものにはなっていない。

心理学の歴史にはさまざまな系統からの影響があり，互いに影響を及ぼしたり及ぼされたりする系統の多様性がみられる。たとえば精神分析学派とその分派，新行動主義と行動主義，心

理学の内観主義，動物心理学および比較心理学，ゲシュタルト心理学等々の歴史がある。同様に，心理学におけるヒューマニスティックな立場の歴史を他の立場とは対立するものとしてたどり，区別することも可能である。残念ながらその影響範囲は最近まで事実上皆無であった。しかし，現在，その影響は小さいながらも一定の広がりが見られるようになってきた。

2-1　ウィルヘルム・ディルタイ（1833-1911）の記述的アプローチ

初めにウィルヘルム・ディルタイについて考察する。ディルタイは，心理学について広範囲の執筆活動を行ったが，心理学は人間科学に属し，自然科学には属さないという立場を取っていた。ところが彼の名前はボーリング（1929/1950）の古典的な心理学史書には，その名前が見出せず，他の心理学テキスト中にも彼に関する記述は一言もない。彼がアメリカの心理学界にほとんどその名を知られていなかったのは当然の事であろう。むしろ，後の心理学史の著作中にディルタイに関する記述がみられるようになった（ex. Wolman, 1960）。それによると，1864 年にベルリンで哲学博士号を取得し数年の教育歴を経て，1867 年バーゼルで哲学教授に任命され，その後，1882 年にはベルリンにもどり，1911 年にその地で没している。

ティルタイの関心は非常に広範囲にわたっていて，自然科学は言うに及ばず，文学，音楽，宗教，政治，歴史に関する著述もみられる。したがって，当然のことながら心理学，教育学にも多大の関心を寄せていたのである。彼の哲学史に関する講義においては，哲学の歴史の大半が数学と自然科学の問題によって占められていたとされる。古代世界における純粋数学，現代の数理物理学などは，精密な知識の源泉として，人間が自然を支配する上で永遠の価値をもつものと考えられるからだという。したがって，そのための方法は，深遠な哲学的問題であるとされた。しかし，現在，そうした従来の哲学的知識（数学・自然科学）は世界知の半分に過ぎないことが知られるようになった，とディルタイは言う。そして残りの半分は，社会の中の，また，歴史の中の人間の研究であるという。

その後彼の関心は，歴史的理性の批判と真の歴史哲学の確立に移っていった。しかし，その初期の発想において，心理学が歴史哲学にとって重要な役割を演ずると考えたために，心理学に関する幅広い著作が残された。人間科学ないし人間研究（精神科学）は厳密かつ体系的であり得るが，しかしそれは，自然科学とは違った意味においてであることが主張されたからである。健全な心理学を確立することは，あらゆる人間科学の基礎を築くことになると考えられた。それまで，自然科学に比して明瞭さにおいて常に一段劣っていた精神科学の方法を，初めて対等の地位に押し上げたのがディルタイだった。その際，彼は精神科学の目的，仮定，方法が自然科学のそれとは別のものであることを指摘した。とは言え，それは自然科学に比べて曖昧なものだったり，主観的なものだったりしてはならず，あくまで自然科学同様の厳密な方法と統制の下にあることを示そうとした。

ディルタイの自然科学と人間科学の区別は次のように要約できる。彼は，たとえ自然科学の方法を人間科学の領域に導入したとしても，それら二つの方法論の間に衝突は起こらなかった

だろうと見ていたようだ。したがって，1859 年という時期に，すでに「法則ないし科学の体系」と「意味および価値の浸透した存在の体系」という区別を行っていた。ディルタイにとって自然科学は人間的でない世界を扱うものに過ぎなかった。人間的世界とは，自由意志をもち，能動的精神を有する人間の所産を扱う世界である。人間科学は，現象を内的，精神的なリアリティの表現として研究し解釈する活動である。そして人間科学は諸現象をその歴史的文脈から引き離せないものである。なぜなら文脈こそが現象に意味を与えるものであり，人間科学は歴史的状況の中で，人間が形成する意味と価値の様式の中で研究されなければならないからである。したがって人間科学は法則の創造ではなく，価値の創造をもたらすものだとされた。

しかし，ディルタイは，当時の心理学が二つの基本的欠陥を有することを理解していた。第一に，心理学は人間の思考と行動がもつ高度な機能を十分評価できない，ということである。心理学が感覚や単純な快・不快について語る分には無害であるし，時には有益であるかもしれない。しかし，芸術家にみられる想像力や，道徳性や価値，自己犠牲や宗教心などについての了解や共感について語る術をもっていないことである。こうした高次の精神活動について学ぶには，鋭い観察者が書き綴った無数の文献（文学）から得るしかない。心理学は詩人たちの知恵と洞察から得た材料に正確な表現と論理的基礎を与えるべきであるが，既存の心理学にはそうした力がない。

第二に，結果の不確実性ということである。ディルタイによれば，それは心理学が誤った方法を採用していたためだと言う。自然科学は 17 世紀科学革命の時代に，要素還元論と実験・観察という方法があらゆる科学の唯一の前提であるとされた。たとえばイギリス経験論の哲学者ヒュームは，心理学を科学的にする唯一の方法は物理学の手続きを適用することだと述べた。しかし，基本感覚や基本感情は物理のように確実なものではないのである。

ディルタイは，これら二つの欠陥を克服するために文学を理解する心理学を構築し，自然科学的方法以外の方法を考案しようと試みた。文学は確かにその優れた内容によって人間の現実全体を把握するという実績を数多く生み出した。しかし，折角の優れた内容も，それが体系的な学問的表現を欠いていることにより，その力は一般的なものへと昇華することはできなかった。文学を理解する心理学は，けっして文学そのものを理解する文学心理学ではない。心理学が精神生活のシステムを記述する体系だとすれば，詩人の著作は心理学をまったく含んでいないと言えよう。しかし，偉大な作家や詩人の人間生活に対する洞察が心理学に課題と素材を与えることは確かである。したがって，心理学は独自の方法によってそうした作家や詩人の手中にあるものを，従来の心理学以上にその記述の網の目に捉え得るような独自の方法が必要なのである。すなわち，伝統的な心理学と同様，一般化と抽象化によるアプローチによって全体系についての直観的了解を可能にするような方法が求められる。

ディルタイが心理学への自然科学的アプローチを批判する場合，それが文学的心理学になるべきだと主張しているわけではない。自然科学と文学の間にもう一つの立場があり得る。それこそが人間科学であり，心理学はそこに属する学問であるべきだという。これらの間の違い

（「説明」科学と「記述」科学の違い）をどのように表現するかについて，ディルタイは次のように述べている。

すべての科学は，それ以上還元できない要素とそれらの相互関係を表す諸法則の決定を求めて対象を分析すべきである。説明科学（自然科学）は，その単位と法則を予め一般的性格を決定された方法論的仮定から取り出す科学である。そこでの仮定は，仮説的構成体であり，その古典的な事例は物理学である。その影響によって心理学は，基本感覚や基本感情という仮説を体験的事実の背後に存在する仮説として採用するに至った（ヴントの実験心理学における基本要素の仮定）。いわゆる実験心理学者は，彼らが精神を記述していると考えていながら，実は，実際の体験からどれほど乖離しているかを認識できなかった。心理学は，その単位と法則とを経験的分析によって，あるいは体験的に現実に与えられるものの綿密な吟味によって発見する科学であるべきである。したがって，基盤に仮説を構築しない心理学を創設しなければならないとディルタイは考えた。そして，その解答が「記述的アプローチ」だったのである。

ディルタイは，因果的関係と「構造的」連関とを対比して，原因が推論されるものであるのに対して，構造的連関はそれ自体意味をもっており，そこに精神の本質が知覚されると述べた。自然科学と人間科学の相違点は，後者が人間存在と人間世界に関与する点であると彼は考えた。したがって，自然科学には知識と説明があり，人間科学には了解と解釈がある。了解とは意味把握であり，それは視覚や推理によって定義できない精神作用である。さらに言えば，了解は人間精神の働きへの洞察をもつこと，ないし，「汝の中に我を再発見すること」を意味している。それは誰もがもつ人間性への内的展望であるとディルタイは論じる。

自然科学が高度な正確さを達成するのに対して，了解はわれわれの熟知した世界内へ入っていくという活動を可能にする。了解は説明に対して，不明瞭で分析不可能な直観なのではないし，訓練された知的作業に置き換えられない神秘的な事柄なのでもない。それは，了解を自然科学的用語によって説明しようとする人たちがしばしば陥る，誤った規準による判断に過ぎない。

2-2　フランツ・ブレンターノ（1838-1917）の体験的心理学

ブレンターノは 1874 年，『経験論的立場からみた心理学』を執筆し，当時としては新しい一つの心理学を提案した。ボーリングの『実験心理学小史』（1929/1950）によれば，ヴントもまた初めてのハンドブックを 1874 年に完成していて，同様に新しい心理学を標榜していたということである。しかし，彼らの心理学は対照的であったという。ブレンターノの方法は経験的であって実験的ではなかった。また，ブレンターノの方法は理屈っぽかったのに対してヴントの方法は少なくとも意図としては記述的であった。そして，ブレンターノは心理作用について調べ体系化したのに対して，ヴントは感覚内容について調べ体系化した。

彼らの間で，すでに経験的と実験的の区別があったことは重要な点であろう。経験的であることは，今日では，往々にして実験的科学の方法に従うことと解釈されているのだが，必ずしもそういう意味ではないということである。ブレンターノ自身，実験結果は重視したが，実験

法を強調することは，方法を過大視し，内容の主要な論点から目を反らすことになりかねないと批判的に捉えていた。したがって実験法に反対していたわけではなく，行き過ぎた実験重視に対して反対していたということである。経験的心理学が重視したのは，ある疑問点について情報をもたらしてくれる「臨界実験」であった。

心理学的分析の基本データは，特定の意識の表出であるというのがブレンターノの主張であり，心理学的分析の基本的用語に精神機能を用いることを拒否することが，彼自身の新しい心理学を構想する動機の一つだった。彼は，特定の意識の表出を「心的現象」と呼び，これを直接観察可能な精神作用の表出であると考えたのである。これは，思想史的には，西欧思想におけるスコラ哲学を基盤にしているという。スコラ哲学における精神作用の実体観念は，イギリス連合主義のジョン・ロックらによるタブラ・ラサ（白紙）からの出発という考え方によって否定されてきた歴史がある。ブレンターノの心的現象は，いわばスコラ哲学の部分的再興と言えるものである。

さらにブレンターノは，精神機能の研究に二つの基本的種類があるとした。一つは，現象への帰納的，実験的，統計的アプローチであり，その成果は確率論によって一般化されると考えた。もう一つは，経験的心理学の概念あるいは仮説の研究である。たとえば「記憶」，「選択」，「失望」とはどのような場合に起こるものかという問題群であり，また，特定の事例にあてはまる精神作用の究極の形はどのようなものかを問う課題である。

彼は，当時の心理学を支配していた生理学的心理学も連合心理学も，ともに正しい方向であるとは考えていなかったために，彼独自の心理学を構想せざるを得なかった。すなわち，意識現象を生理学的基盤によって説明することは意識現象を歪曲することだとする見方がそれであり，また，精神機能の分析，あるいはその基本形態と，精神的作用，およびその状態の生起する法則についての実験的，統計的研究とは全く別物であるとする見方がそれであった。

ブレンターノが人間学的心理学の陣営に加わったのは，主に上記のような問題関心のためだった。彼は，人間的現象は還元不可能であり志向性という特徴をもつと考えた。ここで言いたかったことは，精神現象は精神作用の中の客体という，非志向的存在とは区別されるということである。つまり，心的なものは対象への志向性あるいは内容への関与を特徴としているということである。したがって，彼の意図は，体験の綿密な分析によって発見される志向性の型に従って心理現象を分節化することだった。

また，志向性には全ての心理現象が広い意味での作用であるという含意があった。ブレンターノは，したがって「作用」心理学派と合流し，しばらくの間，作用心理学と内容心理学との間に激しい論争が巻き起こった。ヴントは内容心理学を代表する人物であり，歴史はその時点で内容心理学の勝利を支持したことはよく知られている。

ブレンターノとの比較という意味ではヴントは間違いなく自然科学としての心理学を代表する学者だったが，実は，ヴントも人間科学としての心理学の伝統と無縁ではなかった。ボーリングによると，ヴントが実験を心理学の唯一の方法とは考えていなかったことが分かってい

る。しかし，この事実は歴史書以外ではめったに触れられておらず，それも初期から中期にかけて重点を置かれた実験心理学に対して，二次的な重みしか与えられていない。

2-3　ウィルヘルム・ヴント（1832-1920）の民族心理学

ヴント自身，次のように述べている。複雑な思考の機能を単なる内観の基礎の上で研究しようとする試みがしばしばなされてきた。しかし，これらの試みは常に不成功であった。個々の意識から人間の思考の発達史を構成することは全く不可能である。民族心理学の問題は，人間の共同生活によって生み出された精神的所産に関係しており，それゆえ単に個々人の意識によっては説明できないものを対象としている。なぜなら，精神的所産は多数の複雑な交互作用を前提にしているからである。

したがって，ヴントは民族心理学の方法を実験法から区別するだけでなく，内観法からさえも区別する。そして，人間が集団として理解されるには，歴史的方法の修正によってのみ可能であると主張する。ヴントの『民族心理学の諸要素』（1900 年からシリーズ創刊）には，末尾に「人間性の概念」という章を含み「人間性の発達」を論じている。ここでの方法は，人間の「本質的な人間らしさ」をその定義に含んでいるので，ヴントは人間科学の伝統に所属する資格があると考えられる。

2-4　ウイリアム・ジェームズ（1842-1910）の『心理学原理』

ジェームズは，行動主義の先駆者とも見られるという意味では多面的な人物であると言えよう。しかし，今日の基準からすれば彼は人間科学の立場に適合していると言える。事実，ジェームズが現象学的心理学の先人でもあることが近年の研究で明らかにされた。『心理学原理』を一瞥しただけでも，意識の流れ，意志，経験への関心など，人間学的心理学の特徴を示すテーマが多数見出せるのである。彼は，フッサールが提起した志向性の考え方や，メルロ＝ポンティが示した生きられる身体の考え方さえ，彼らに比して明晰さには欠けるけれども，すでに先取りしていたと言える。ジェームズが体験的現象の多くの重要な側面を明らかにし，体験をそのまま明らかにすることができたのは，彼が正しく体験的現象への記述的態度を堅持していたからに他ならない。記述によって発見したものを，安易に科学的準拠枠（彼が重視していたもう一つの原理）の中に組み入れなかったのも，その記述的態度によるものだったと考えられる。

しかし，ジェームズはついに統一的な観点には到達できなかったのも事実である。したがって，現在もジェームズの著述の中に多くの貴重なヒントが見出せるにもかかわらず，ジェームズ理論と呼べるものは見出すことができないのである。

2-5　エドアルト・シュプランガー（1882-1963）の文化科学としの心理学

シュプランガーは，ベルリン大学でディルタイの講座に後継者として就任し，先任者である

ディルタイの影響を強くうけた心理学者である。自らの心理学を文化科学に出発点をもつものであることを宣言している。心理学は文化科学として，内的現象を心的な状況全体に所属する意味体系の中で，主観的評価と客観的評価の双方を認め，客観的価値をもつものの実現を「パフォーマンス」と呼んだ。この用語の導入によって，あらゆる行動的データが彼の体系に組み入れられることは想像できるけれども，それですべての現象が明らかになるわけではない。

シュプランガーの心理学が了解を目指していて，因果性を求めず「意味」的関係を求める点は，まさに人間性心理学の基本的態度を共有するものである。彼にとって了解とは，個々人の生活と行為における内的意味のきずなを把握する複雑な理論的作業であるとされる。ここで了解するとは，精神的関連がもつ特定の価値体系へと入り込むことを意味する。また，それは物質的側面と精神的側面を併せ持つ客観化を基礎にして可能になるとされる。シュプランガーにとって主観性は，常に客観的なものの創造に関与している。彼は，主体は経験と創造によって，歴史的，社会的世界へと織り込まれていると考える。それゆえ，主体は純粋に主観的な孤立状態から解放され，客観的現実と関係づけられるのである。シュプランガーは次の３つの理由から，主観性の関与によって生まれる現実を客観的なものとみなす。(1)記号のように，直接の価値の担い手として機能していてもいなくても，この現実は物理的な形を伴っている，(2)それらの現実は多くの個別的主体の相互関係から生じてきていて，その意味で個人はそれら集団的決定にかかわりをもつ，(3)現実は超個人的妥当性をもった一定の意味法則に基づいている。この第三の理由によって，シュプランガーは理念的な精神の法則の存在について主張する。つまり，客観性の意味を人間主体の諸行為によって明らかにすることができると考えるのである。これらの観点から，彼は，伝統的な心理学にみられる多くのディレンマを回避できたと信じた。代表的な問題は，①心身関係にまつわるすべての問題，②伝統的心理学が自然科学的志向を偏重してきたために，心的現象と客観的世界の特殊な事態とを関係づけてしまうという問題，③物理学の影響ゆえに，複雑な心的過程をその要素によって理解しようとする問題，等々。そして，アプローチの違いをはっきりさせるために，彼は，伝統的心理学を「要素の心理学」，彼自身の心理学を「構造の心理学」と呼んで区別した。

2-6　モーリス・メルロ＝ポンティ（1908-1961）の現象学的心理学と志向性

メルロ＝ポンティによれば，志向性という概念の価値は，還元によってはじめて了解されるものだという。志向性の現象学的概念を特徴づけるのは，知識によって明白な識別作用の中で措定される以前に，世界の統一性が完成の形で，あるいはすでに在ることとして，「生きられている」という事実だという。メルロ＝ポンティはさらに，志向性の一層深い意味は，フッサールが作用志向性と作動的志向性とを区別した際に，フッサール自身によって暗示されたものだと述べた。前者はわれわれが自発的に態度や構えを決定するような場合のことであり，後者は世界と，欲望，願望などに現われるような，われわれの生活との自然的かつ前叙述的統一の事を指す。それは，フッサールの独創性が厳密な意味で志向性という概念を超えたところに

あるということを意味する。むしろそれは，この観念を仕上げて，表象の志向性の下に，他の人々が「実存」となづけてきた，もっと深い志向性を発見したところにあるというのだ。つまり，志向性は基本的に認知的関係を示すのではなく，「人間」存在の関係を示すものなのである。

メルロ＝ポンティの用語法では，志向性は存在の一つの関係である。志向性は人間の世界への開示性，世界に向けての方向性，あるいは，世界への本質的な直接性を記述することとして理解される。これらの表現は，人間と世界との始原的な関係を指示しようとしているのであり，そうしたパースペクティヴからすれば，認知的ないし厳密に意識的な関係は「世界―内―存在」の推論された二次的な形態なのである。

上記の心理学への洞察の妥当性は，そうした洞察が意識や体験といった現象を心理学の枠内で研究可能にするような理解の仕方を提供しているところにある。すなわち，その特殊なパースペクティヴおよび力点のゆえに，現象学的哲学は還元不可能な関係，志向的な関係を明るみに出してきた。一般に，心理学者たちは，因果関係によって意識を理解しようとしてきた。そして，意識が非常に困難な主題だとわかった一つの理由は，それが因果関係によっては理解できない点にある。意識と体験はあくまで志向的な関係によって理解されるべきものなのである。意識の志向的関係は，反省と記述の方法によってこそ発見されるのであり，人間の活動全体の中で果たす意識と体験の役割の重要な局面がよりよく理解されるのである。

歴史的に言えば，志向的な関係が意識の文脈において見出されてきたのに対して，メルロ＝ポンティの解釈は実存にまで広がっている。ジョン・B・ワトソンが行動について語った時，彼が心中抱いていたのは，他の人たちが実存と名付けてきたもののことであった。言い換えれば，ある哲学者たちが実存と呼ぶものを，ある心理学者たちは行動と呼ぶのである。したがって，われわれが話題にしてきたことは，行動が志向的関係と共通のカテゴリーに属しているということである。それは，原因―結果の用語では行動を理解できないばかりか，因果関係こそ行動の現象を理解するのに最も不適切な概念であることを意味する。なぜなら，行動は「物体」の運動ないし「客体」の力学という文脈においてばかりか，「有機体」の反応としてさえも見られるべきではないからである。その優位性は，行動そのものにある。すなわち，行動を一つの表現あるいは顕現とするような人間と世界との関係にこそある。行動の諸現象の理解にふさわしいのはまさに志向的関係であり，他の何ものにも帰することのできない関係なのである。

3．ピアジェとメルロ＝ポンティの発達論争

3-1　メルロ＝ポンティの発達心理学に対する批判

澤田（2021）は『幼年期の現象学』の中で，ソルボンヌ大学におけるメルロ＝ポンティの「講義」や，その後の著作を具に検討した結果，次のような内容の議論を行っている。澤田に

よると，メルロ＝ポンティは，1920年代から晩年まで，発達心理学のパイオニア的存在である，ジャン・ピアジェの仕事にたびたび言及し，論評しているとのことである。子どもの心身の発達と成長を経験的かつ実証的な視点から観察することにより，ピアジェは『子どもの世界表象』において，子どもの自己中心的な生活様式（「自己中心性」），心身の発達と成長に伴う脱中心化の現象，さらにそこから，三段階の発達プロセスを提唱したとされる。そして，彼は，『行動の構造』において自己中心性の現象に着目し，『講義』では，脱中心化と三段階の発達プロセスを厳しく批判しているのだと言う。メルロ＝ポンティのピアジェに対する評価はピアジェの見解に対する賛同より，批判の方が勝っていたようであり，早い時期からピアジェの理論に批判的なスタンスを取っていたとのことである。問題は，彼がピアジェ理論のどの部分を批判し，どの部分を取り入れたのかを検証することであると言う。

3-2　ピアジェ理論における「自己中心性」と「脱中心化」

ピアジェは『子どもの世界表象』の中で，「自己中心性」の現象について説明している。子どもに聞き取り調査を行う中で，「思考」についての質問に対する子どもの答えに次のようなものがあったという。「思考」が実行される場所を聞かれた時，子どもは，それが「口」であると答えたと言う。ピアジェが観察した他の子どもたちも，「耳」，「声」，「舌」，「血」等々，身体の特定の部位あるいは分泌物に自分の思考を位置づけた。さらに，「頭」で考えることが分かるようになった当初も，「頭」という部位に思考が宿っていると信じているようだったとのことである。

大人の観点から「思考」を検討するなら，当然，身体の特定の部位あるいは生理現象から独立した活動だと結論づけられるであろう。ところが子どもは，思考という非物質的な活動を自分の身体のどこかに宿っている「モノ」と信じていた。子どもに固有のこうした信念を，ピアジェは「実在論」と呼び，その時の思考活動を「物質的な行為」と定義した。子どもにとって，思考は身体や物質と同様，「実在している」のだと言う。

こうした，子どもの思考の物質性と実在性から，ピアジェは，子どもの生活様式の自己中心的な特徴を見出した。彼は，子どもの思考の物質的な性質の中に，自己と他者，内部と外部の混同を指摘する。子どもは精神面の活動（思考）を物質（身体部位と生理的現象）から切り離さずに行うと言う。この点において，子どもの生活の中で，「内部」（思考）と「外部」（物質，身体）は十分に分かれておらず，「混同」されているとする。

大人は自分に属する部分（「主観」と「内部」）とその外部（「客観」と「外部」）との区別を前提とした上で，前者の限界を画定し，言語表現や身体の姿勢を媒介にして後者と関係を持つ。しかし，子どもは，本来，自分の外部にあるものすら，自分の内部に取り込んでいる。このような内部と外部の「混同」をピアジェは，「魔術」と「アニミズム」という用語で説明する。子どもたちは，太陽が自分について来ると信じている。その時，自分について来る太陽の自発性を強調するなら，それはアニミズムになるし，子どもたちが太陽を動かしていると信じ

るなら，魔術ということになる。これらの現象から，子どもの思考は自己中心的であると言える。したがって，ピアジェは子どもの思考様式の特徴を「自己中心性」であると結論づける。

3-3 「自己中心性」のなかの自我構造

主観と客観の区別をつけず，子どもは，後者を前者に自由に取り込むことで，思考活動に従事していることをピアジェは見出した。ピアジェの分析が優れているのは，こうした「自己中心性」の文脈において，特殊な自我構造を読み取っているからだと言う。子どもは，自分の自我と世界を混同していて，自分自身を意識していないことを示しているのだと言う。

ピアジェは自己中心性という現象の中で，子どもが自分の内部と外部の区別をしていないだけでなく，自分の存在（「自我」，「自分自身」）をも十分理解していないと論じた。外部の物質が自分から独立した存在であることを理解していない以上，子どもは，当然のことながら，自分の内部（「自我」）あるいは内面（「意識」）の限界も十分に画定されていないのであるとされる。したがって，子どもの「自己中心性」と大人の自己中心的な性格とは基本的に異なる。大人の場合，この水準の自我は，内部と外部の区別がある程度ついているから，自己中心性がある時点に達すると，自分の利己的な性格を反省する契機が必ず出現する。反対に子どもの自己中心的な自我は，自分の内部と外部の区別がつかないまま展開するので，この水準における自己中心性は，内部に回帰することもなければ，内部を知ることで外部の限界を認識することもない。この意味において，子どもの自我は際限なく展開するので，子どもは「自分が世界の中心にいると信じる」ようになり，「自分が世界なのである」。したがって，彼の視点は「絶対的」なものとなる。このように，自分の内部も外部も省みないまま展開する自我の在り方をピアジェは「絶対的な自己中心性」あるいはフロイトを参照しつつ，「ナルシシズム（自己愛）」もしくは「全能」と記述したのである。

自己中心性という現象を発見することで，ピアジェは，子どもの思考に垣間見られる，きわめて強固な自我の存在と構造を指摘した。子どもの思考における内部と外部の無分別を未熟と見なすだけでなく，大人の自我とは異なる自我構造を提示した点にピアジェの仕事の独創性があるとされる。

3-4 ピアジェ理論における脱中心化

ピアジェは，『子どもの世界表象』の中で，自己中心性からの脱却についても言及していると言う。この脱中心化のプロセスは三段階に分けられるとされる。第一段階は，自己中心性の段階で，子どもは思考の物質性を確実に信じている事態で，先の例では，「口」や「耳」を使って考えているということ。第二段階は，物質の選択肢が制限される段階で，人間が「頭」で考えているのだと漠然と理解するようになるけれども，思考が「頭」という物質のどこかに存在していることを依然として信じていると言う。第三段階は，11 歳から 12 歳段階において，「思考することが，語を媒介として，物に働きかける」という事実を理解するようになり，

思考と物質が分かれ，「脱物質化」される。他方，後者は実在として思考されるのではなく，言葉を媒介として「象徴的」に，すなわち「記号」として表現されるようになる。「頭」という存在は，もはや思考そのものとはみなされず，思考が展開する際の物質的基盤という意味になる。この第三段階において，子どもの思考は，内部に制限され，外部の物質世界とは画然と区別されるのだという。

このように，ピアジェは自己中心性（第一段階）という現象を詳細に記述しつつも，自己中心的な自我から脱中心化（第三段階）された自我への移行の中に，子どもの成長の兆候を読み取ることで，彼独自の発達心理学を構築したとされる。

3-5　メルロ＝ポンティの自己中心性に対する評価

メルロ＝ポンティは，ピアジェの自己中心性と脱中心化の説をどのように評価していたのだろうか。彼は『行動の構造』の「心身の関係と知覚的な意識の問題」において，次のように自己中心性を記述している。「ピアジェに尋ねられた子どもたちが答えている通り，思考は「喉の中に」あり得るし，それは矛盾しているとか，延長するものとしないものとの混同とかではない。なぜなら，喉は，いまだ言語活動における音の現象を生み出す振動帯の総体ではなく，一つの質的な空間の中の特権的な領域にとどまっているからである。」ここでメルロ＝ポンティは人間の身体およびその機能を「生理学的な実在」とみなす古典的な科学のアプローチを批判している。そして，この批判の論拠の一つとして，自己中心性の現象，すなわち「喉」で考える子どもに肯定的に言及しているというのである。

メルロ＝ポンティによれば，「喉」を使って物事を考えているという子どもの発言は，生理学的な観点からみれば「矛盾」であり，ピアジェの発達論的な視点からすれば，内部（延長しないもの）と外部（延長するもの）の「混同」である。しかし，メルロ＝ポンティはそうした観点に同意するのではなく，むしろ，身体の特定の部位が，子どもの思考にとって一つの参照項（特権的な領域）となっている点に注目する。ピアジェに思考の場を尋ねられ，子どもは自分の思考活動を意識し，反省せざるを得なくなる。しかし，彼の生活の中で，内部と外部の区別はまだ十分に確立されていない。この時，子どもの意識は自分の身体の特定の部位がすでに彼の生活において，その意識の志向と切り離し難く結びついていることを示している。ピアジェの観察した子どもが「喉の中で」思考しているとするなら，彼が自分の思考活動を意識する際に，「喉」は彼の生活において「特権的」な価値を備えているのである。そして，彼の意識の志向は，物質や生理的な現象ではなく，「意味」としての喉を指し示すことで発動する，というのである。

以上のように，メルロ＝ポンティは，人間の意識と志向が純粋に精神的作用ではなく，身体（子どもの場合は特定の部位，大人の場合は「運動」の所作）という存在を参照していることを示しつつ，ピアジェの自己中心性を肯定的に援用している。他方，ピアジェが自己中心性から提唱した，内部（延長しないもの）と外部（延長するもの）の「混同」に対しては否定的な

スタンスを取っているという。この意味で，メルロ＝ポンティが自己中心性という現象の中でも身体の特定の部位が特権化される側面を評価するのに対して，その未熟な側面（混同）を強調する見方については，批判的に退けていることが分かる。

3-6　現象的身体の生成

ソルボンヌでの講義において，メルロ＝ポンティは，ピアジェの発達理論を以下のように厳しく批判している。「ピアジェは，子どもの考え方を文字通り理解しようとしているのではなく，それを大人のシステムで表現しようとしている」のだと言う。ピアジェが子どもの生活を詳細に観察しているにもかかわらず，その観察結果を大人の視点からしか分析できていない，というのがメルロ＝ポンティの批判のポイントである。「大人が理解している意味での対象の永続性，非永続性への信念を，子どもに対して前提としても無駄なのである」と言う。子どもの思考は，ある時は対象の「永続性」を示し，別の時にはそれを放棄する。しかし，永続性と非永続性という区別は，大人になって習得する基準である。したがって，この基準をまだ習得していない子どもの思考や行動を，当該の基準から分析するのは「無意味」なのだと言う。

『講義』のメルロ＝ポンティは，ピアジェの分析手法を誤謬推理にも近い評価によって厳しく批判する一方，『行動の構造』におけるのと同様，ピアジェが観察した自己中心性という現象そのものについては肯定的に捉えているということである。子どもは，大人が言う意味の心的なものという概念をもっていない。したがって，物理的なものという概念も持っていない。子どもにしてみれば，「口」や「声」は物理的な現象ではないのである。「身体」によって子どもがなにを理解しているのかといえば，それは物理的な身体ではなく，「現象的」な身体である。つまり，子どもが内的に経験しているような身体であり，外部世界との接触を開始する方法上のシステムなのである。同じく，声とは語の現象のことであり，子どもは思考の潜在的な対象，すなわち自分の内的な経験を参照しているのである。したがって，それは決して「物質論的な概念」などではない，とされる。

メルロ＝ポンティは，子どもの思考が関わる身体を「現象的身体」と定式化している。ピアジェの分析方法に対する批判の中で既に見た通り，子どもは，大人の基準（「心的なもの」と「物理的なもの」の区別）を使って身体という存在を考えているわけではない。子どもの思考が関わる身体（「口」，「声」，等々）は，物理法則の枠内にある物体（物理的な身体）とは別次元に属している。既存の定理や概念が遮断された水準で生成している点において，子どもの身体は「現象的な身体」なのである，とされる。

こうした特殊な「身体」は，子どもの思考の参照項として機能している。「口」や「声」を客観的に見るならば，確かに，子どもの思考はこれら身体部位の中にあるはずはない。しかし，子どもが思考という作用を考える時，これらの部位には特権的な性質が備わっている。思考という作用が一度「口」や「声」に基礎づけられるからこそ，子どもは外部世界の物質（太陽）に思いめぐらすことができるのである。したがってメルロ＝ポンティは，これらの要素を

外部世界との接触の端緒となる「システム」と表現する。現象的身体に属する要素（「口」，「声」）は，第一に，「内的」もしくは「潜在的」な思考の対象としての役割を担っており，第二に，主体の行為（思考，言語，等々）と外部世界の関係の基礎となっていることが分かる。

3-7　生きられた脱中心化

メルロ＝ポンティは，ピアジェが大人の観点を用いて子どもの行動を分析することで，自己中心性から脱中心化のプロセスを描き出す分析手法を厳しく批判した。しかし，『行動の構造』においても『講義』においても，彼は自己中心的な子どもの思考を手掛かりとして現象学的な意味における身体とその生成を検討しているのである。この事実から，ピアジェの発達理論，とりわけ自己中心性という概念が限定的にせよ，メルロ＝ポンティの現象学に果たした貢献が見て取れると言う。「幼児の対人関係」と題された翌年の講義の中で，メルロ＝ポンティは「生きられた脱中心化」という表現を使用している。脱中心化の現象が重要となるが，それは知的な作動としてではなく，生命的な作動により実現される生きられた脱中心化である。自己中心性という現象の中に「現象的身体」の発想を見出したのと同時に，メルロ＝ポンティは，厳しく批判を加えた「脱中心化」というピアジェの概念にも新たな意味づけを行ったのである。

3-8　身体，あるいは潜在的な中心性

主著『知覚の現象学』の中で，メルロ＝ポンティはピアジェの仕事に散発的に言及するものの，「自己中心性」にはほとんど言及していない。また，ここでの中心概念である「身体」は，発達論的には大人の身体が素材として想定されている。そして，メルロ＝ポンティは，この「身体」を現象学的な観点から考察する中で，身体に備わる固有の中心化の働きを，様々な表現（極，中心的な終局，潜在的な中心）を用いて提示している。つまり，ピアジェが幼年期の人間の自己中心的な特徴を描き出したとしたなら，メルロ＝ポンティは，ピアジェと異なる視点と水準において，中心性という問題にアプローチしているのである。身体の中心化の機能を導出するにあたり，メルロ＝ポンティは，「身体空間は外的空間と区別されうるし，その各部分を展開するのではなく抱合しうる」という身体に固有の性質を指摘している。

人間の身体が属する空間を「外的空間」から区別しているのである。外的空間においては，物質であろうと身体の各部位であろうと，空間内の各要素は均等に配置される。つまり，物質も身体の各部位もそれぞれ空間内の一地点として，均等に配列される。これに対して，「身体空間」に位置付けられた「身体」は，他の物質と同じ身分で空間内に均等に配置されるのではない。その場合，主体の置かれた状況に応じて，空間内の諸要素を集約（抱合）するのである。この身体の集約機能について，メルロ＝ポンティは，次のように説明する。最終的に，私の身体がひとつの「形態（ゲシュタルト）」であり，それを前にして，無差別な地の上に様々な図があるとするなら，それは，私の身体がその使命により極となり，その使命に向かって存

在しており，目的に到達すべく自分自身へと寄り集まるからである。

メルロ＝ポンティは「身体空間」という水準における身体を主体の空間内における運動の「極」と説明する。「外的空間」に位置付けられた身体の身分は，同じ空間の中に配置された様々な物質と変わりがない。しかし，「身体空間」という水準において，「身体」という存在が問題となるやいなや，この身体は，空間内での運動の「目的」ないし「使命」と関わるようになる。具体的に言えば，この身体空間においては，運動主体の前でその身体運動の達成のために必要な要素（図）とそうでない要素（地）が分離する。均質的な空間に勾配，すなわち，「図」と「地」の分節が生じるのである。

3-9　自己中心性から身体の中心化へ

ピアジェが提唱した脱中心化という発想は，自己中心性の段階の後，子どもは身体部位を無差別に使用（口＝思考）するのをやめ，思考と言語の働きを媒介として，各部位を象徴的に説明するようになる，というものだった。したがって，自己中心性の段階において思考の場を独占していた「口」は，脱中心化を経た後，食物摂取の器官，発声の装置，など，様々な意味に細分化される。そして，その都度，状況に対応した意味が言語上で表現されるようになる。こうしたピアジェの身体論に対して，メルロ＝ポンティは，健常（具体的な運動）あるいは非健常（抽象的な運動）な身体運動を現象学的な観点から考察することで，人間の身体が脱中心化を経た後も，意識や思考の働きに媒介されることなく，中心化の運動を独自に維持していることを主張する。自己中心性の段階において，子どもの「口」はそのまま思考の場となり，「足」の動きは太陽を動かすもの（魔術）だった。これをメルロ＝ポンティの表現で説明するなら，身体の各部位は「特権的」な場となり，自分に関わる要素（思考，太陽，等々）を自由に取り込んでいることになる。自分が関わる対象を自由に集約する身体の機能は，脱中心化を経た後の身体にも確認される。この場合，主体の身体は意志や思考の介入を必要とせず，自分の運動に関わる事象を自由に取り込む。

このように，ピアジェが提唱した自己中心性の水準における身体，それに対するメルロ＝ポンティの解釈（『行動の構造』，『講義』），そして，現象学的身体論（『知覚の現象学』）には，中心化の働きという共通の特徴が確認される。この点において，メルロ＝ポンティは，ピアジェの自己中心性と脱中心化の議論を批判しつつも，自己中心性の理論から新たな中心性の理論，すなわち，身体による中心化の働きという発想を得たことが伺える。

4．ピアジェによる哲学的心理学に対する批判

以下，ピアジェ著『哲学の知恵と幻想』（1965［1971］）による現象学を含む「哲学的心理学」に対する批判についての議論である。メルロ＝ポンティのピアジェ批判に対する直接の反論については稿を改めて論じることとする。

4-1　哲学的心理学と科学的心理学

哲学的心理学という用語には，２つの意味がある。第１に，哲学者である学者たちが作り上げた心理学すべてを漠然と指すものである。このようなタイプの心理学は，科学的心理学の創始以前には，哲学者が心理学的な現象を形而上学的レベルの考察によって議論することを指すものだった。したがって，純粋に思弁的なものだったり，実証的な心理学の初歩的な試みだったり，あるいは両者を同時に含むものだった。最も古いものとしては，アリストテレスの『デ・アニマ（霊魂論)』が知られている。「デ・アニマ」はラテン語であるが，「心とは何か」，「魂について」等と訳されたこともあり，全３巻 30 章からなるいわば心理学書である。第１巻は従来の理論に対する批判，第２巻は「感覚」に関する総論と各論（視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚)，第３巻は主に「思惟（思考)」がテーマになっている。目次だけを見れば，現代の心理学書のものだと言ってもそのまま通用しそうである。特筆すべきは，この魂（心）が身体と不可分のものであり，身体を動かす機能として見ていた点である。プラトンの心身二元論と違って，一元論である点，現代の心理学との共通性があるように思われる。

哲学的心理学の第２は，科学的心理学とは明確に別のものであろうとするばかりか，それに取って代わろうと目論むものである。ピアジェによれば，その新しい哲学的心理学はメーヌ・ド・ビラン（1766-1824）に遡ることができると言う。ビランは，心身の対立を軸とする「人間的生」の上位に，個人精神と神との神秘的合一である「霊的生」を考え，下位の「動物的生」と合わせて生の三段階説を提唱した。ビランは，カントの物自体と現象との区別を信じ，自らの研究を後者だけに限ろうと考えていた。しかし，その結果，彼の研究は唯心論的思弁に陥ったという。

哲学的心理学は，それぞれ形而上学的体系に結びついているので，当然，その体系による変異を被り易い。科学的心理学においても，学説間に変異が存在するのは確かである。しかし，両者には大きな相違がある。実験心理学者たちの間には，意見の一致を導くような検証の道具が存在する。数多くの心理学会があっても，それらを取りまとめる上位の組織が可能である。なぜなら，広い意味における実証的な方法を共有できるからである。それに対して，弁証法的唯物論の信奉者，現象学支持者，実存主義者，ベルグソン主義者，カント主義者を一つの組織にまとめることは想像できない。

第一に，哲学的心理学の対象そのものに纏わる問題がある。この対象は現象の範囲に属していると言えるのかどうかという問題である。例えば，現象学は，「現象」という概念の中に，科学的心理学とはまったく別のものを入れている。したがって，問題は次のことを明らかにすることが出発点となるとピアジェは言う。１．哲学的心理学は，「事実」を取り扱うのか，それとも，それ以外の「本質」とか，「直観」とか呼ばれるようなものを取り扱うのか，２．「志向」とか「意味」とかという名で呼ばれているものは，これらの概念のいずれに属しているのか，３．科学的心理学の対象が意識のみに関係しているのかどうか，哲学的心理学と科学的心理学との境界線を引く際の基準として意識や内観といったものを用いるのかどうか。事実か本

質かの観点からすれば，メーヌ・ド・ビランやベルグソンの哲学的心理学は，事実の土俵に位置していると考えられ，かつ，そこに留まることを望んでいると考えられる。また，経験主義や実験心理学より，自分たちの方が事実によりよく到達し，しかも，事実について最も優れた解釈を提供すると考えている。

反対に，サルトルの心理学は，本質を目指して事実を超越すると主張している。しかし，サルトルが心理学の領域における「事実」とは何かについて，科学の言葉と同じ意味で用いているか疑問である。なぜなら，サルトルの「事実」に関する定義はピアジェら科学者のものとは相当違っているからである。サルトルは，「事実をあてにすることは，事の性質上，それだけ切り離されたものを当てすることであり，実証主義をもって，本質的なものよりも偶発的なものを，必然的なものよりも偶然的なものを，秩序よりも無秩序を選び取ることであり，原理的に言って，本質的なものを未来の方へ押しやってしまうことである。実際，心理学者たちは，偶発的な事実をいくら集めても本質に到達できないことは，0.99という数字の小数点以下に無限に数字を付け加えても，決して１という数字に達し得ないのと全く同じだということを理解しようとしない。もしも，彼らの目的が細部にわたる知識の蓄積だけにあるのだったら，何も言うことはない。ただ，誰もこんな収集家の仕事には興味がないだけだ。ところが，もし彼らが，その謙虚な態度のうちにも，やがては自分たちの特殊研究を基礎として，一つの人間学的総合が実現されるだろうという希望を持つならば，それは自己矛盾に陥るということだ。」と述べた。

4-2　科学的心理学における「事実」

科学者が考える「事実」は，次のような３つの性格をもっているとピアジェは言う。第１と第３は，サルトルが「本質」と呼んでいるものに近いかもしれない。また，第２は，第１と第３の検証として用いることができる。それぞれの科学的「事実」は，(a) ある問題に対するある解答，(b)ある確認あるいは解読，(c)一連の解釈（それは問題を提起する仕方そのものにおいても，また，同じく，確認そのもの，すなわち，経験の解読においても既に暗示されているし，喚起された問題に対して実在が与えたこの解答を理解する仕方においても明示されている）から成っている。

まず，第一に，事実とは，ある問題に対する解答である。もし，サルトルが直観に任せて心理学者たちを判断する前に，事前に相談していれば，心理学者たちが偶発的なものをあてにしているのではなく，問題を提起することから始めることを知ったであろう。そうした問題は，多かれ少なかれ知的な問題を含んだ問題なのである。たとえば，発達途上にある人間，すなわち子どもにおいて，整数は，フレーゲとラッセルが考えたように，一対一対応，および「等価な類の類」の構成によって，論理的類から直接に成立するのか，それとも，その構成はもっと複雑で，順序の観念を前提とするのかを明らかにする問題なのである。この問題が「本質」に関係があるかどうか私（ピアジェ）は知らない。なぜなら，私は本質とは何かをよく理解して

いないし，また，哲学者たちの解答が多種多様であることに気づいたからである。私は，フレーゲが，あらゆる心理主義とは独立に，相互的な一対一対応の中に，数の本質を発見したと信じていたこと，また，フッサールが「偶発的なもの」の代わりに，「本質」を探求するように仕向けたのはフレーゲの研究であることは知っている。したがって，うまく提起された問題はつねに概念的であり，ある人々が本質と呼ぶものに多かれ少なかれ，溶け込んでいると私は考えている。ここで例として選んだ問題は，数の「本質」に迫るものだと思う。ただ，根本的な相違がある。すなわち，私ならば，その点に関して私が抱いている好都合な先入観に拘らず，その本質を私の自我の中に探し求める代わりに，それを，理論上のこじつけに冒されていない，発達途上の個人（子ども），あるいは，そうしたこじつけを冷静に切り捨てた個人において，検討することが慎重な態度であると信じる。ニュートンの傍に落ちたリンゴのように，ある事実が時にはある「偶発的出来事」に似ているように見えるのは確かだが，しかし，偶発的な出来事は，ニュートンがある問題を提起していたからこそ「事実」となったのである。もし，アダムがイヴの差し出したリンゴを取り落としたとすれば，彼は，そして我々もまた原罪から免れただろうが，しかし，だからと言って，重力を発見することはなかっただろう。

事実とは，「経験の解読」である。本質と偶発的出来事との観点からもっとも大きな誤解があるのは，この点においてである。なぜなら，哲学者たちは，経験主義者であろうが，実証主義者だろうが，現象主義者だろうが，問題を明確に考察し得る唯一の方法―ある事実を確認する主体を実験的に研究し，その確認が何から成り立っているかを分析すること―に専念する代わりに，問題を単純化したり，混乱させたりしたからである。発生的認識論センターにおいて，この分析を行い次のことが分かった。確認した実験的研究は，それについての経験主義が与える解釈と矛盾していること，同時に「事実」を批判するために経験主義の事実観に固執している人たちの解釈とも矛盾していることが確かめられた。

デュエムが物理学的事実の領域で示したように，確認とは，解釈体系すなわち「理論」に，密接に結びついているものである。

系列等差垂直棒を形成する課題で，発達段階により，単に並べるだけの段階，全体としては短い棒から長い棒へと並べる（ただし，長さの順序は前後している）段階，正しく，短い方から長い方へと順序よく並べる段階へと変化する。これは，子どもが発達段階に応じた系列の「観念」をもっているか否かによっているとピアジェは考える。これは数の保存課題で，より明瞭に子どもによって示された。そして，この現象は複数の文化圏においても同様であることが確認されている。こうした概念化は，いわば「経験の解読」であるが，決して単なる「偶然なものの解釈」などではなく構造化を含む事実なのである。これは，サルトルが主張する「偶発的なもの」でも「無秩序」などでもないことは明らかであろう。

(c)「事実」は，暗黙の解釈を前提とする。他方，事実はその理解を保証する明示的な解釈へと至るのでなければ，科学的事実とは言えない。その解釈が暫定的な仮説として，決定を先延ばしされることはあり得る。それは客観性の特徴として認められるべきものである。科学が

「事実」としてその価値を吟味してきた事柄は，本質と偶然の問題とは関りのないものなのである。

（以下，次号に続く）